

「大谷伝説の里」の歴史を訪ねて

第13期 歴史・郷土学部 B班



【比丘尼山を背景に】

安藤高一 (撮影)	川合秀之 (書記)	鈴木登起 (会計)	西田勝美 (編集長)	内田六平 (渉外・撮影)	清水昌代 (渉外)	江原直史 (会計)
	森屋正男 (サブリーダー)	関根孝之 (書記)	富井芳巳 (リーダー)			

《目次》

第1章	はじめに
第2章	大岡地区の歴史と伝説
第3章	大岡地区の石仏
第4章	大岡地区のため池
第5章	課題研究を終えて

第1章 はじめに（担当：富井）

1.1 テーマ選定理由

私たちの郷土は、古くは縄文時代から脈々と続く歴史を有するものとなっています。特に東松山市北部に位置する大岡地区は、鎌倉幕府初代将軍である源頼朝の伊豆配流の際、密かに物資援助を続け、鎌倉幕府で重要な地位にいた比企氏ゆかりの地であることや、江戸期を通じてこの地を治行した旗本森川氏の菩提寺である宗悟寺や森川氏造営の秋葉神社が存在し、また、国指定重要文化財「宝篋印塔(ほうきょういんとう)」、県指定重要文化財「板石塔婆」のある光福寺、更に路傍に多く見かける馬頭観音や、大きな川を有しないこの地で産土神(うぶすながみ)として信仰されている大雷神社やこの地ならではの「ため池」等など、歴史的にも大変貴重な施設やそれにまつわる伝説があります。

しかし、それらはあまり知られていないことから、私たちはウオーキングトレイル「大谷伝説の里コース」を実際に歩き、可能な限り調査し、全員で確認することを目標に活動することとしました。

活動の最大の目的は、市民大学の基本理念である「生涯学習を通じて人づくり、街づくり貢献」に少しでも役立つ活動成果を目指すことです。

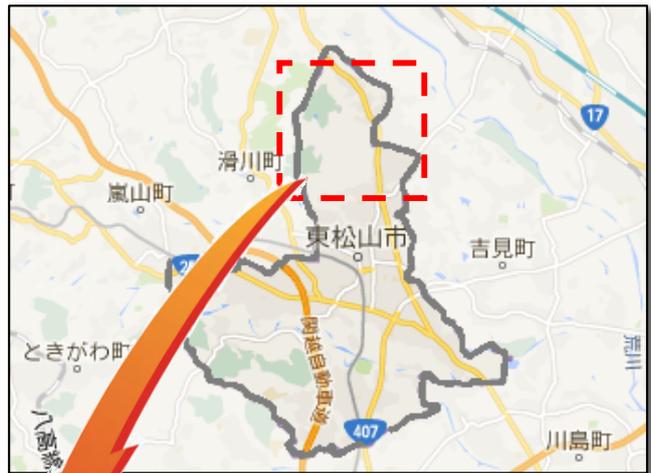
1.2 活動経過（*印：課外活動）

No	活動日	場所	活動内容			
1	H27/2/18(水)	研修室 201	役割分担、テーマ決定			
*2	H27/2/26(木)	大谷伝説の里	大谷瓦窯跡・ぼたん園・秋葉道コース調査			
*3	H27/3/14(土)	大谷伝説の里	ぼたん園・比企氏伝説コース調査			
*4	H27/3/19(木)	大谷伝説の里	上岡観音コース調査			
*5	H27/3/30(月)	研修室 201	研究項目、講師依頼について、根岸友山宅訪問			
6	H27/4/1(水)	研修室 201	講師への質問事項、グループ分けについて			
7	H27/4/15(水)	研修室 201	西村氏(郷土研究家)による講義 比丘尼山、秋葉神社			
*8	H27/4/23(木)	大雷神社	須田氏(大雷神社・秋葉神社宮司)による講義			
*9	H27/5/21(木)	研修室 4	江原氏(埋蔵文化財センター副所長)による講義			
10	H27/5/27(水)	研修室 201	研究項目の集約、担当決め			
*11	H27/6/4(木)	大谷伝説の里	宗悟寺、光福寺、庚申塔調査			
*12	H27/6/15(月)	大岡活動センター	藤野氏(大岡第1土地改良区理事長)による講義			
以降、グループ別討議・執筆・編集作業を行う						
13	H27/6/17(水)	研修室 201	14	H27/7/8(水)	研修室 201	1 学期終業
*15	H27/7/22(水)	研修室 2	*16	H27/8/5(水)	研修室 2	
*17	H27/8/19(水)	研修室 2	18	H27/9/2(水)	研修室 201	2 学期始業
*19	H27/9/5(土)	研修室 1	*20	H27/9/15(火)	研修室 201	
21	H27/10/14(水)	研修室 201	22	H27/10/21(水)	研修室 201	
23	H27/11/4(水)	研修室 201				

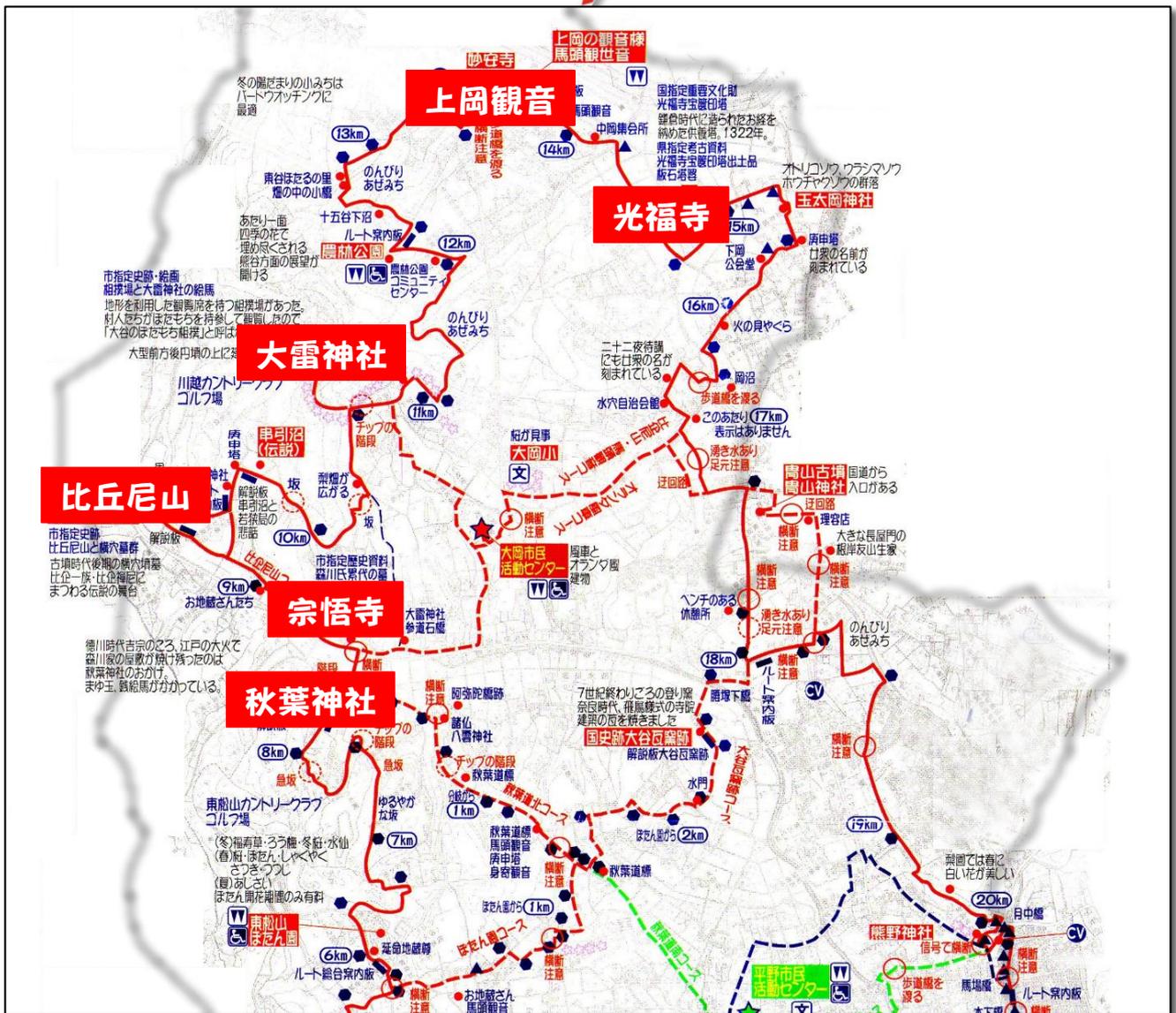
1.3 「大谷伝説の里コース」

ウォーキングトレイル「大谷伝説の里コース」は、昭和58年（1983）東松山市がルートを設定・整備したウォーキング7コースの一つです。

東松山市の北部「大岡地区」を中心に身近な自然環境に生息する数々の貴重な動植物、神社仏閣や遺跡などの文化財が周囲の自然と一体となった地域を巡り四季折々の変化も堪能できる魅力あるウォーキングコースです。鎌倉武士「比企一族」の伝説を残す大谷の地を訪ねることができます。



【「大谷伝説の里コース」の位置】



【大谷伝説の里コース】

第2章 大岡地区の歴史と伝説（担当：安藤、内田、清水、鈴木、西田）

大岡地区は、江戸時代には大谷村と岡郷村に分かれていました。大谷村は旗本森川氏が支配し、岡郷村は文禄元年(1592)からは、旗本酒井氏が支配し、寛政8年(1796)以降は松平氏の支配に代わりました。大谷は浸食されてできた多くの谷があり、岡郷は比企丘陵の台地部にあたる地形的地名です。明治22年(1889)大谷村と岡郷村が合併し、それぞれの頭文字をとり大岡村となりました。大岡村の小字は60近くある中で12か所は谷がつきます。谷(やつ)がいかにかいかに多いかということです。ため池や沼が多いのはこの地形によるものです。この地区には、5世紀頃の関東屈指の規模の三千塚古墳群、7世紀頃の吉見百穴と同様の横穴墓群など、太古の人々の営みを残す地です。また武蔵国で有名な上岡馬頭観音があり、数多くの石仏がみられます。しかし、伝承・伝説に残されているのは鎌倉時代頃からになります。

大岡地区は市の北部に位置し、平成27年5月現在人口3,672人(市の4.2%)、面積10.6km²(市の16.2%)の地域です。この地区は歴史もあり古墳や神社・お寺が数多くあります。以下に私たちが実際に歩き、講義を聞き、調査・確認した結果を報告します。

2.1 扇谷山宗悟寺(曹洞宗)

2.1.1 宗悟寺

宗悟寺は比企の歴史には欠かせない寺の一つです。源頼朝没後、二代将軍頼家の舅として、比企能員(ひきよしかず)は幕府の要職にあったが、頼家が病むと北条時政は関東28か国を頼家の子一幡に、関西38か国を頼家の弟千幡(後の三代将軍実朝)に与え、自分はその後ろで幕府の実権を握ろうとしました。そのために、比企氏は邪魔者となり、能員は謀殺され、一幡を擁した比企一族はともに亡ぼされ、頼家も廃されてしまい北条の時代になります。比企一族と鎌倉幕府とは深い関係があり同じ様な地名も残っています。

- ・滑川—滑川(なめりかわ)
- ・主膳寺—修禅寺
- ・扇谷(宗悟寺の山号)—扇谷(おうぎがやつ)
- ・腰越(小川町の地名)—腰越(こしごえ)
- ・比企—比企ヶ谷(ひきがやつ)

夫頼家の遺骨を抱いて比企郡大谷村に逃れた若狭の局は比丘尼山に庵を結び「大谷山寿昌寺」を建立し、弔ったと伝えられています。寿昌寺は天正18年(1590)徳川家康の関東転封に伴い、大谷の地を知行した旗本森川氏の菩提寺となりました。



【宗悟寺山門】



【宗悟寺本堂】

森川金右衛門氏俊は、寺を比丘尼山から現在の扇谷に移し、寺の名を「扇谷山宗悟寺」と変えました。同氏の法号は「桐蔭宗悟居士」と言い、寺の背後には森川氏累代の墓もあります。また、天下統一の際の武勲により徳川幕府より賜った陣羽織が森川氏の末裔にあたる森川哲明氏より宗悟寺に寄贈され、本堂に展示されています。



【森川氏累代の墓】



【陣羽織】

比企一族と縁の深いこの地域には、宗悟寺の東、雷電山の真南にある谷が、いわゆる城ヶ谷で「埼玉県史」や「埼玉の神社誌」には、ここに比企能員の館があったと記しており、口碑もそのように伝えています。しかし、残念ながら館跡は発見されていません。宗悟寺には、若狭の局が持ち帰ったと言われる頼家公の位牌があり、境内には地元有志による比企一族顕彰碑が設置されています。



【頼家公の位牌】

頼家公の位牌の法名
長福寺殿當寺開基大相國公一品壽昌義仁大居士



【比企一族顕彰碑】

2.2 大雷神社およびその周辺

2.2.1 大雷神社

社殿に向かって左側にある建立を示す石碑には、「大雷神社由緒沿革」として『当神社は伊邪那美命（いざなみのみこと）の御子大雷命（おおいかずのみこと）を奉斎し、ご創建は今から壱千百十余年前清和天皇の御代貞観元年（859）己酉四月十二日と社伝に言い伝えられている、貞観六年（864）辛亥七月二十二日には武蔵縦五位下大雷神縦五位上を授けられ三代実録武蔵風土記等の古文献にも記載されている如く古代より有名な神社である…云々』と続きます。これらは全て口伝であっても紙の貴重な時代にはかなり正確に伝えられているようです。

大谷地方は山間の地で非常に水利が悪く、川と言われる様な水の流れはなく全て谷（やつ）と言われる小さな谷ばかりです。必然的に水不足によって五穀は良く実らないことから雷電山の上を平坦にして、大雷命〔水配（ミクマリ）の神様〕を祭祀し、干ばつの年には村民はもとより近郷近在の農民達挙げて雨乞い、降雨の祈願に詣でる等深く信仰されたそうです。



【大雷神社由緒沿革碑】



【大雷神社本殿】

雨乞いは、まず宮司が祈願祭を執り行い水の枯れないと言われた御神井から水を汲み、村民近郷近在の農民達全員が手桶を手送りで本殿に運び、御幣に水を掛け祈願します。神井の水が汲みきって無くなるほどの大干ばつの年には、近くの『神社の沼』と言われる串引沼で再び祈願して、沼の水を手桶に汲んで全員で手渡ししながら社殿に運び、御神体の御幣に水を掛けて降雨祈願します。それでも尚、雨が降らない時は村人全員で御百度参りをしたそうです。大雷神社へ雨乞いに来た印として、木札に、年月日、住所などを書き込んで社殿や神楽殿の軒端に打ち付けます。男衾、寄居、児玉など県北地方の方々の祈願者が多かったそうです。御神井から汲んだ水を竹筒に入れて杉の葉で蓋をして持ち帰り再び祈願すると雨が降ったと伝えられています。神井の井戸替えに村人総出でひっぱった綱は2kmもあったと言います。実際角川の雷電橋を渡って一の鳥居から社殿正面までの参道はとてつもなく長く、この道は今では市道になっていて狭いが舗装されています。神井の井戸は、現在は埋め立てられて川越カントリークラブ場内にあり「御神井史蹟」の石碑が建っています。

江戸時代の安政四年（1857）落雷によると思われる山火事で社殿が炎上した際、御神体として奉られていた御幣は自ら本殿の外に飛び出し焼失を免れたので、村民の崇敬の念は益々深まったと言われています。この御幣は現在も本殿に御神体として奉られています。

神社には市の文化財に指定されている絵馬の他に、相撲の額や本殿には飯田岩次郎（千之助の子）の作と言われる彫刻があり、立派な歴史的文化遺産と言えます。以前は社殿右側に神楽殿があり昭和30年代までは神楽を舞っていましたが、継承する人もなくすたれてしまい、建物も老朽化により解体されてしまいました。4月12日の例大祭に氏子による雷難除講の祈願が毎年行われています。

社殿正面玄関の上には、根岸友山が75歳時の書の額が掲げてあり、神社の幟旗（のぼりばた）も友山の書です。

根岸友山は私塾「三余堂」や剣術道場「振武所」を自邸内に作り、近郷近在の子弟に剣術、学問の機会を与えました。友山は清川八郎の浪士組に、その後近藤勇の新撰組に加わったが意見が合わず、京より帰郷して江戸新微組に加わり、晩年は冑山村にて次男武香（たけか）と共に文化活動に励みました。

武香は、剣を千葉周作、学問は寺門静軒らに学びました。後、地方大惣代に任ぜられて地方行政に係わり埼玉県議会副議長に、翌年には第二代議長となり、明治27年（1894）には貴族院議員となりました。また学者として東京大学の坪井正五郎氏と吉見百穴の発掘調査を行い日本の考古学研究に貢献し、更に『新編武蔵風土記』を内務省地理局から全80巻を刊行しました。大雷神社の宮司の家には全80巻が現存するそうです。



【大谷の牡丹餅相撲】



【根岸友山書 幟旗】



【根岸友山書 額】

2.2.2 大谷の牡丹餅相撲

五穀豊穰の年に大雷命に感謝し、関東の三大辻相撲の一つと言われる「大谷の牡丹餅相撲」を関東取締役の命により一の辻で奉納し、来る年も豊穰である様祈願しました。また一説には大雷命に雨乞いの祈願に相撲の持つ強い力を借りようとしたとも伝えられています。観客席は、村の人々の持分が決まっています、そこへ親類縁者を招き祝い酒や牡丹餅を振る舞いました。これが牡丹餅相撲の名前の由来です。

団子屋さん（清水家は「ダンゴ屋んち」と言われ現存します）や他の色々なお店が出て賑やかだったそうです。

当時最高位の大関の宿泊先は清水八十宅と、小山茂八宅と決まっておられ、関取衆の宿泊した家では、風呂桶の底が抜けるなどしたことから特注品を用意したそうです。また泊まった関取の四股名が屋号になっている家があったようです。

2.2.3 山姫の伝説（民話）

雷電山の山姫様は一年に一度だけ秋晴れの日には舞を舞うと伝えられています。踊りを舞っている時には耳を澄ますと美しい音色が麓の人々にも聞こえてきました。そのうっとりとする調べは村の若い衆の心を動かし「さぞ美しい姫であろう、一目でいいから見てみたい。」と誰しも思いました。しかし、お姫様は気の毒にも足が一本しか無く2本の足を持っている人を見ると呪いを掛けると言われていました。それで山に登るときは1本足で歩いて登らなければならず、その上1年に2度実を付ける栗の木の実を17個拾って神殿に御供えしなければなりません。17個と言う数はお姫様の年齢ではないかと言われていました。ある時、お姫様を見たい一心で一人の勇気ある若者が、栗を17個拾って雷電山に一本足で登って行きましたが、夜になっても帰って来ませんでした。翌日、村中の人達が総出で探したらその若者の家の棟にしがみついて眠っていて、若者の着物の裾には一本足の蝦蟇蛙（ひきがえる）が食いついていました。若者はそれから3日3晩眠り続け目が覚めても何も喋らず、とうとうそのまま年老いてしまいました。一度だけお姫様の絵を描いたそうですが、足は1本でしかも蝦蟇蛙の足のようだったといわれています。

2.3 比丘尼山の周辺について

2.3.1 比丘尼山の歴史

比丘尼山は、つげの櫛を地面に立てた様な半円の形をした美しい山です。周りには柵の付いた遊歩道も設けられています。この山こそ、比企一族の伝説の一つとして今も語りつがれている所です。源頼朝の乳母である比企の尼は、夫である比企遠宗（とうむね）亡きあと、この地に草庵を結びました。尼は頼朝が伊豆の国に流された時、平家討伐旗揚げまでの20年間比企の里から食料物資等送り続け、精神的にも懸命に支えた話は有名な事として語り継がれています。

2.3.2 比丘尼山の横穴墓

比丘尼山のもう一つの姿は横穴墓です。埋蔵文化財センターの江原氏によると、開口している物が3基あり、うち1基は道沿いに現存し、2基については金井塚良一氏（考古学者）が調査された平面図が公開されています。比丘尼山全体では40～50の数が推定されています。昭和32年11月29日付けで「比丘尼山と横穴墓」の名称で東松山市指定史跡になっています。比丘尼山の横穴墓は吉見百穴・黒岩横穴墓と同時代の古墳で、この比企地方に多く見られます。



【比丘尼山の横穴墓】

私達も篠藪の坂を登って3基の中の1基の横穴墓を確認しました。横穴は苔むしていて古代の物である事を強く感じました。

2.4 串引沼の伝説

比企地方は、源頼朝の信頼が厚い比企一族の本拠地であり、一族は鎌倉幕府成立に大きな原動力となりました。数々の伝承やロマンを今に伝えています。

地元出身の郷土史研究家清水清氏は著書「蘇る比企一族」の中で、「大谷は九十九谷と言われあと一つあれば、幕府は鎌倉でなく大谷に開かれた」と言う伝承を書いています。今回歩いて見て谷と沼の多いことを実感しました。その一つに最も大きな沼である「串引沼」があります。現在はゴルフ場の中にあり、橋も架けられ美しい景観を見せています。



【串引沼】

この串引沼の伝説は、比企能員の娘である若狭局が2代将軍源頼家の妾となり、比企の乱の時、比企館で嫡男一幡と共に炎の中に消えたという説もありますが、運よく生き延び故郷の比企の里にのがれ、祖母の比企禅尼と頼家の菩提を弔ったという説が有力です。尼となった若狭局が比企禅尼にうながされ、源頼家から頂き肌身はなさず身につけていた鎌倉彫の櫛を涙ながらに沼に投げ入れ、頼家への想いを断ち切った事によりこの沼は串引沼とよばれる様になったということです。

2.5 秋葉神社の伝説

秋葉神社は、徳川家の旗本で大谷に領地を得て陣屋を構えた森川金衛門氏俊により勧請したと伝えられています。その本社は遠江国すなわち現在の静岡県にあり、火防の神と知られています。享保2年(1717)徳川吉宗の時代、江戸本郷大火の際には、靈験が現れて森川氏の屋敷のみが焼け残ったという伝説が残されています。その靈験が大谷の秋葉神社の御神像とうり二つと思った留守居の者が村に帰り本殿を開けた所、台座のみが残っていたと言う話を聞いた森川氏は大層お喜びになり、大谷村の秋葉神社を立派に改築され、毎年4月18日の祭りには米1俵寄進して、維新になるまで13年間続いたと言われていました。尚、火防祈祷のみならず後には養蚕祈祷も盛んに行われ、神楽を奉納すると共に、酒を酌み交わし祭りを楽しみました。今も秋葉道として参詣の道しるべが残されています。



【秋葉神社】

2.6 光福寺およびその周辺

2.6.1 光福寺沿革

四国山光福寺は曹洞宗で、安達郡里村法性寺の末寺です。本尊は十一面観音、釈迦堂本尊と共に行基の作と伝えられています。

明暦の頃、(1655～1657) 村内にあった知足院茂林寺を遷し、合して一つにしたとも伝えられています。寛政二年(1790)の光福寺文書から、当時境内は6,120坪あったと伝えられています。現在本堂に大きな釈迦如来の仏頭が納められており、当時の隆盛を知ることができます。



【光福寺】

2.6.2 宝篋印塔(ほうきょういんとう)・板石塔婆

光福寺境内には鎌倉時代に建立された高さ2mを誇る国指定の宝篋印塔があり、今なお均整のとれた美しい形をとどめています。宝篋印塔は石塔の一種で内部に「宝篋印陀羅尼」の経文を収めたことからこう呼ばれています。この宝篋印塔は、塔身正面に「宝篋印塔」と刻まれ、基礎部分裏面の銘文から、元亨三年(1322)藤原光貞と比丘尼妙明の供養のため建立されたと知ることができます。この宝篋印塔の下からは14世紀前半頃の中国製陶磁器である白磁四耳壺の蔵骨器が出土しています。



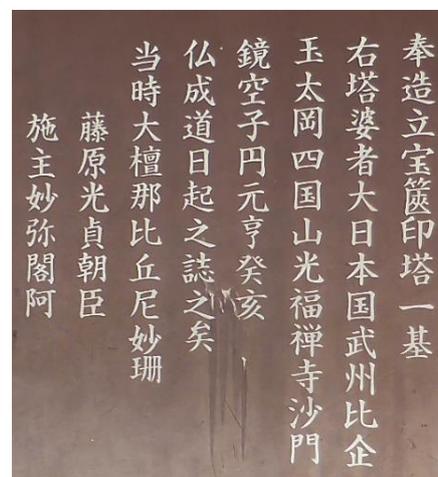
【板石塔婆】



【宝篋印塔】

宝篋印塔の収蔵庫内に併設されている県指定重要文化財の板石塔婆は、碑面上部に阿弥陀三尊の來迎図が線刻され、その下には「嘉元四年(1306)二月」の紀年銘があり、両側に花瓶が刻まれていて美術的にも価値の高いものです。

これらの資料から、鎌倉時代末期のこの地に、白磁四耳壺を手に入れ、宝篋印塔の下に納め、また、板石塔婆を建立するなど信仰心が厚く、経済力もあった中世武士の存在を窺うことができます。



【宝篋印塔 裏面の銘文】

2.6.3 お釈迦様

釈迦堂は慶安二年(1649)に八石の御朱印を賜ったと伝えられています。残念ながら50年ほど前、台風により倒壊し、釈迦如来(高さ3メートルほどの座像)も壊れ、現在は仏頭が本堂に、仏胴は本堂裏に保管されています。保存状態も良く、その大きさからも当時の隆盛を知ることができる貴重なお釈迦様です。釈迦堂と共に早急に修復されることを願っています。



【倒壊前の釈迦堂】



【仏頭】



【壊れた仏胴】

2.6.4 とっくり坂(民話)・お地藏様

その昔、光福寺の裏山にタヌキの親子が住んでいました。このタヌキたちは悪戯が大好きで、夜遅くこの坂を通る村人を脅して、楽しんでいました。特に松山あたりで酒を飲み、ほろ酔い加減で帰る酔っぱらいは格好の標的で、とっくりに化けてはゴロンゴロンと坂を転がり降りて、村人の驚く様を楽しんでいたとのこと。以来、この坂はとっくり坂と呼ばれるようになりました。今は、この坂は新道を整備するために埋め立てられて、見る事ができなくなりました。

お地藏様は身長120cmと長身で、願い事をよく聞き届けてくれると評判で、毎月4日、14日、24日にはきれいに掃除され、花も飾られます。



【とっくり坂の地藏】



【今は無きとっくり坂】

第3章 大岡地区の石仏（担当：江原、関根）

「大谷伝説の里コース」を歩いてみると、新しい発見が次々と出てきました。なかでも歴史を再認識したのが、石仏でその数の多いことでした。地域に密着して信仰を集めている石仏について研究項目として取り上げることになりました。東松山市石造記念物調査報告（石仏）によると、市内には下表の通り数多くの石仏が建立されております。今回は、①庚申塔 ②馬頭観音 ③地藏菩薩 ④六地藏の4種類の石仏を取り上げることになりました。



【大谷吉ヶ谷石仏群】

東松山市石造記念物調査報告による石仏の分布一覧表（墓地の中は除く）。

地区別	庚申塔	馬頭観音	地藏菩薩	六地藏	その他	合計
大岡地区	18	36	19	3	40	116
市内合計	112	193	191	33	313	842

3.1 庚申塔

3.1.1 庚申信仰

庚申信仰は、中国の三大宗教（儒教・仏教・道教）の一つである「道教」の教えで説かれる「三尸説（さんしせつ）」から始まったと言われています。十干十二支の組合せで60日に一度巡ってくる「庚申（かのえさる）」の日に、寝ている間に体から抜けだした三尸（三猿）が天帝に告げ口をするというものです。



【玉太岡神社前の庚申塔】

8世紀初頭に日本に伝来し、庚申の夜に謹慎して眠らずに過ごす「守庚申（しゅこうしん）」と呼ばれる行事が行われ、平安時代には碁・詩歌・管弦の遊びを催す「庚申御遊（こうしんぎょゆう）」と称する宴を張るのが貴族社会の習いであったようです。鎌倉時代から室町時代になると上層武士階級へ広がりを見せ、やがて「庚申待（こうしんまち）」と名をかえましたが、当時流行していた「日待・月待」といった行事と同じく、夜明かしで神仏を祀ることから「待」と言ったのではないかと考えられます。庚申待が一般に広がったのは、15世紀後半に守庚申の際の勤行や功德を説いた『庚申縁起』が僧侶の手で作られ、庚申信仰は仏教と結びついたこの頃からと推測されます。庶民の庚申待ちの夜の過ごし方は多様で、念仏を夜

通し唱えたり、それぞれにご馳走を持ち寄り酒宴して過ごしたりなど、楽しみもあり信仰もありであったろうと思われます。

庚申信仰に基づいて建てられた石塔を庚申塔と言ひ、塚の上に建てられたことから庚申塚、塔の建立に際して供養を伴ったことから庚申供養塔とも呼ばれています。これらは江戸時代に盛んに建立され、最初のピークを前期（1671～1690年代）、2回目のピークを後期（1731～1750年）と見ることが出来ます。2回目のピークを過ぎると、建立数が減少し、1800年の庚申年を過ぎる頃にはほとんど建立されなくなります。1860年代にやや盛り返しますが、一時的なものでその後減少します。

大岡地区では上岡観音堂の1855年銘の庚申塔をもって建立は終わっていますが、現在は18基が確認されています。建立者については、村中・講中の建立が大半であり、10～20人程の名前が刻まれ、発起人になった人物は、講の中心人物になるような信仰の厚い人、僧侶、世話役が出来る人など様々であったと思われます。特殊な例としては、玉太岡神社前の宝暦11年（1761）銘のものは、台座に「おきん・おきを」というように11名の女性だけで講を作り、塔を建立したのがあります。

3.1.2 三尸虫（さんしちゅう）・青面金剛（しょうめんこんごう）

道教では、人間の体内には三尸という3匹の悪い虫が棲み、帝釈天の縁日の夜、人の睡眠中にこの虫がこっそり身体の中から抜け出して天に昇り、その人の悪事をすべて帝釈天に報告し、帝釈天はそれに応じて、その人の寿命を縮めるとされています。



【三尸虫】



【青面金剛】

青面金剛は庚申講の本尊であり、この三尸の虫を抑える力を持った金剛童子で、青い顔で憤怒の形相をしており、しばしば三猿（見ざる、聞かざる、言わざるの3匹の猿）を従者としています。彩色はその名の通り青でされますが、この青は釈迦の前世に関係しているそうです。

3.2 馬頭観音

大岡地区の建立数は36基が確認されており、半数以上の19基が上岡観音の妙安寺観音堂境内に建てられています。大部分は道路拡幅や区画整理などにより移設集約されたものです。上岡地区の妙安寺は、曹洞宗の寺で山号を「慈雲山」と言います。滑川町福田の成安寺の末寺で開山は祖真で、文禄元年（1558）12月に亡くなったと

伝えられています。当初山号は「諏訪山」と称しましたが、18世孝道和尚のころ、寺の改築に伴い「慈雲山妙安寺」に改称されたと言われています。当初から観音堂として馬頭観音を祀っていましたが、有名になったのは江戸時代からで、軍馬、農耕馬の守り本尊として信仰を集めていました。明治以降県内はもとより関東一円、信州、甲州、東北地方から馬持ちが参拝し、馬頭観音としては関東地方随一の霊場と言われています。



【上岡馬頭観音群】

毎年2月19日に行われる縁日には、今でも絵馬市が開かれ「上岡観音絵馬市の習俗」として国の「選択無形民俗文化財」の指定を受けています。絵馬市の風俗を絶やさぬよう地元の方々が尽力されています。



【上岡馬頭観音の縁日】



【上岡馬頭観音縁日の絵馬市】

馬頭観音は馬の供養や無病息災を祈願して建立されたもので、道標を兼ねたものもあります。建立地は道路沿い、寺院、個人の家などです。江戸時代の中期は「村中」、「講中」、「複数の人たち」等の建立が多く、江戸時代の後期では次第に個人の建立が増え集団での建立とほぼ同数になりました。後半になると文字塔になる傾向があります。明治期の後半から最終期（昭和）では、個人で建立したものがほとんどで、特定の馬の供養のためのものになってきます。大谷野田の野口家では、火災で馬が焼死し、享和二年（1802）馬頭観音を建立してその馬の供養をしております。

3.2.1 幕末における馬の夫役

助郷は労働課役の一つで、江戸時代に徳川幕府が諸街道の宿場の保護および人足や馬の補充を目的として、臨時的に宿場周辺の村落に課した夫役のことを言い、馬も補充として提供を課せられました。幕末になると松山地域の諸村も助郷が課せられることが多くなり、それをめぐる紛争が起こったようです。めまぐるしい政局の展開の中で、東海道・中山道などの交通量が急増したことにより、鴻巣宿や桶川宿の定助郷村であった川越藩の諸村に海防のための人員動員がかかり、これらの諸村が助郷の負担

を周辺の他領の村々に転嫁しようとしたことなどがあり、農繁期にも働き盛りの男や、強馬を宿場を取られ、助郷村が疲弊する時代があったようです。

3.3 地藏菩薩

大岡地区のお地藏様は単体 19 基が確認されており、像容は頭をまるめ法衣をまとった法師の姿で、右手に錫杖、左手に宝珠を持った立像が大半を占めています。お地藏様は、閻魔王の本地仏で常に六道をめぐって衆生を救い、極楽に行けるように力を貸してくれるものと信じられていました。江戸時代になると民間信仰と結びれて広く信仰され、火除・盗難除・病氣平癒など、あらゆる願いをかなえてくれる仏として、祈願され建立されるようになったものです。建立者は個人、講中、村中などで、安置されている建屋の管理、修理、建て替え等も行います。お祭りはそれぞれ地域社会の楽しみになっていました。



【大雷神社前の地藏】



【宗悟寺前の地藏】

3.4 六地藏

六地藏は大岡地区で 3 基が確認されており、像容は丸彫りの地藏が 6 体並んで建てられているものが 2 基、石塔に浮彫りされたものが 1 基あります。六地藏は地藏が地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道を輪廻転生する衆生を救済することから、六つの分身を考えて六地藏として信仰したもので、平安時代に始まったといわれています。

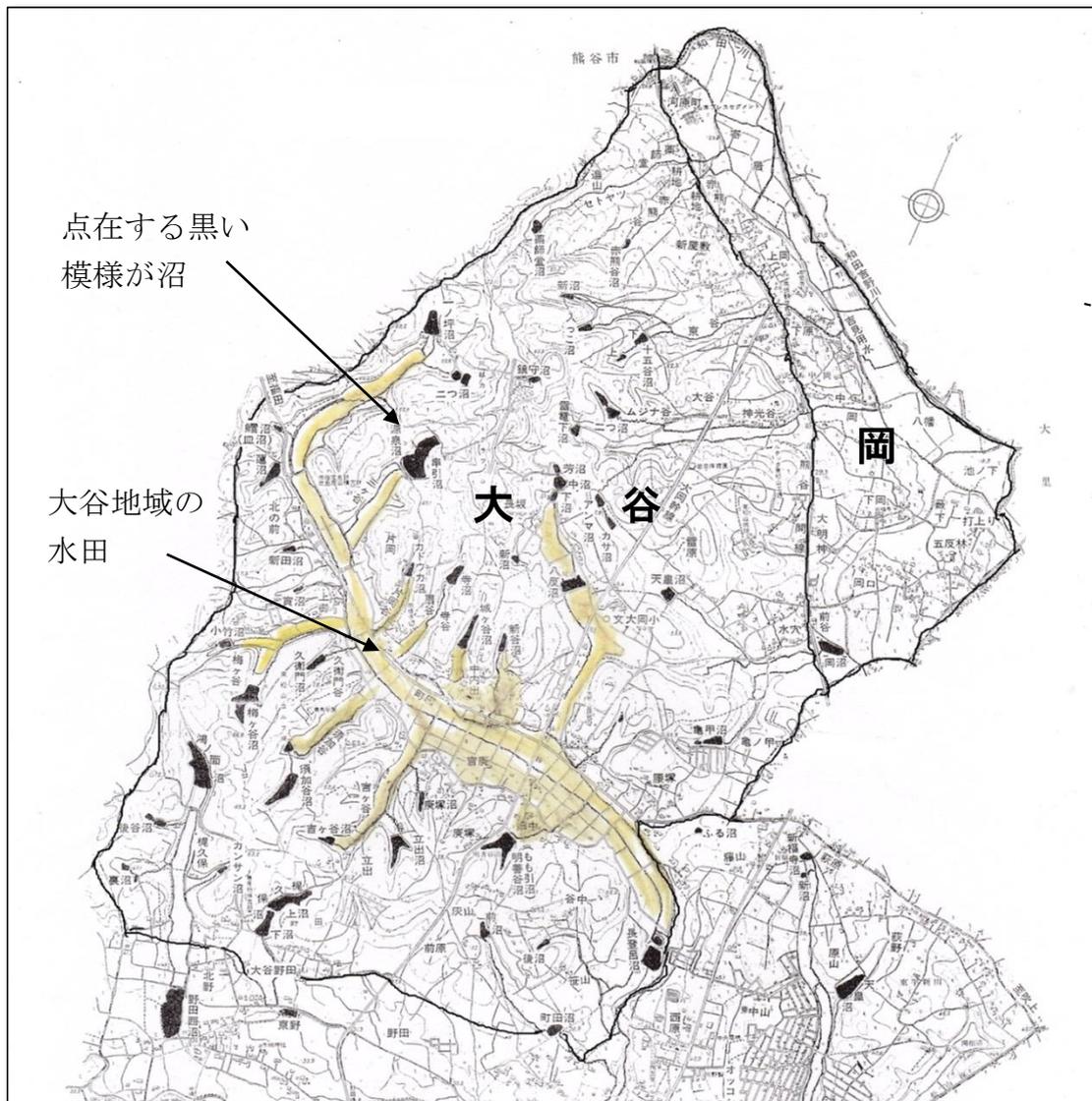


【妙安寺の六地藏】

第4章 大岡地区のため池（担当：森屋、川合）

大岡地区は今も沼や雑木林や竹林があちこちに見られる自然豊かな地区です。この地は東西に丘陵が走り、南北に谷（やつ）が切り込んでいます。谷とは丘陵地が侵食された谷状の湿地のことです。大岡地区には大きな河川が無いので、古くからこの谷の水をせき止め、ため池として稲作をしてきました。現在のため池は江戸時代から整備されてきたといわれています。ため池は大谷地域に集中していて、その数は47になります。私達はこの大谷地域のため池を研究課題に選び調査しました。

4.1 大岡地区の沼の分布図



【大岡地区の沼の分布図】

4.2 大谷地域のため池

4.2.1 主なため池の概要

大谷地域の16のため池は大岡第一土地改良区で管理しています。貯水量、排水の仕組み、流域水田面積、稲作戸数を調査しました。

No.	名称	貯水量	排水の仕組み	流域水田面積	稲作戸数
1	一ノ坪沼	7.5 千m ³	段樋（手動ポンプ）	26.7 千m ²	197
2	串引沼	30.0	竪樋（新しい形式）	29.5	
3	蓮沼	3.6	段樋	26.5	
4	中沼	3.0	段樋	19.5	
5	下沼	1.2	段樋		
6	新沼	1.0	竪樋（古い形式）	利用無し	
7	八反沼	5.4	竪樋（新しい形式）	39.2	
8	片岡沼	1.0	竪樋（古い形式）	8.3	
9	寺沼	4.0	段樋	9.4	
10	城ヶ谷沼	3.5	段樋	2.7	
11	新谷沼	1.7	段樋	7.4	
12	梅ヶ谷沼	10.5	段樋	18.9	
13	須加谷沼	7.2	段樋	20.7	
14	吉ヶ谷沼	1.5	竪樋（古い形式）	4.6	
15	立出沼	6.9	段樋	23.6	
16	明善谷沼	6.0	竪樋（新しい形式）	10.3	
明善谷沼以南の流域水田面積				200.2	

- ・貯水量合計 94 千m³ 東京ドームの 0.76 杯分
- ・水田面積合計 470 千m² (47ha) 東松山市全体の 1.3%
- ・地権者数合計 197 戸
- ・1戸当たりの耕作面積 2.4 千m² (24a)

4.2.2 その他 野田、東平、岡地域の水田灌漑用のため池など

No.	名称	No.	名称	No.	名称
1	薬師堂沼	12	芳沼	23	裏沼
2	赤熊谷沼	13	アンマ沼	24	カンサン沼
3	新沼	14	カサ沼	25	前沼
4	入っこ沼	15	新田沼	26	後沼
5	下十五谷沼	16	寅沼	27	町田沼
6	上十五谷沼	17	天皇沼	28	ふる沼
7	ムジナ谷沼	18	小竹沼	29	鴻ノ面沼
8	鎮守沼	19	九衛門沼	30	梶久保沼（上）
9	二つ沼	20	亀甲沼	31	梶久保沼（下）
10	雷電下沼	21	後谷沼		
11	皿沼	22	庚塚沼		

4.3 ため池の管理

それぞれのため池に「沼預かり」と呼ばれる人が居て放水を担当しています。水田に水が必要な農家は土地改良区の水利委員会に申し込み、水利委員会から「沼預かり」に放水の指示が出ます。

稲作で水を必要とする主な時期

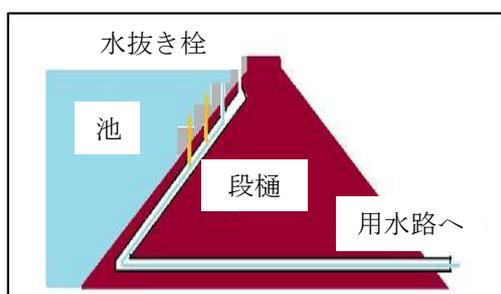
- ・ 5月下旬 代掻き（しろかき）
- ・ 5月下旬～6月上旬 田植え
- ・ [7月初め頃「土用干し」といって一時水田から水を抜く]
- ・ 8月上旬 稲穂が出る頃（出穂水）
- ・ [9月上旬（刈り取りの10日前頃）に水田から水を抜く]

農業用水路

ため池の水は農業用水路に流し水田に引き込みます。年1回用水路整備を住民全員で実施しています（8月初旬）

4.4 ため池の放水の仕組み

段樋（だんぴ）または斜樋（しゃひ）ともいいます。排水口が階段状に作られ、鎖で繋がれた排水口の蓋を開け放水します。水位が下がれば順次下の排水口を開けます。

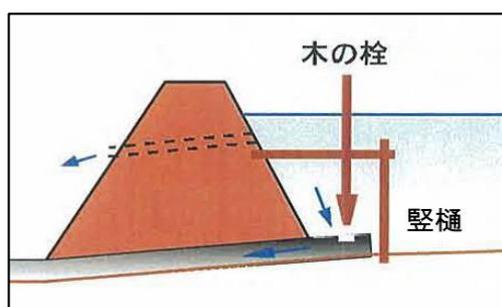


【段樋の仕組み】

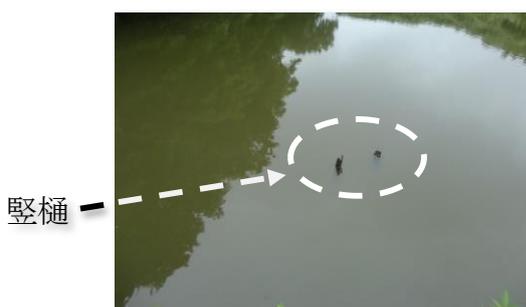


【城ヶ谷沼の段樋】

豎樋（たてひ）は、古い形式では木製の栓で沼の底部に作られた排水口を塞ぎ、栓を持ち上げて排水口をあけます。沼のなかに入り作業をするため、排水口に引き込まれる等の危険があります。

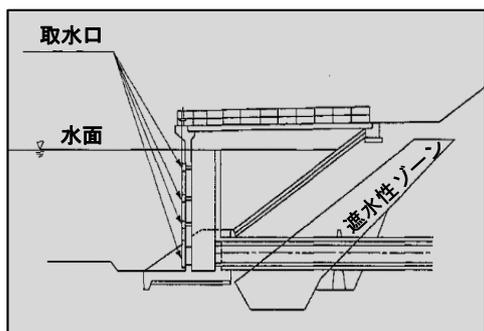


【豎樋の仕組み（古い形式）】



【吉ヶ谷沼の豎樋（古い形式）】

竖樋の新しい形式は沼の中に足場を組み、ハンドル操作で排水口の開閉を行う。水中に入らないので古い形式に比べ危険は少ない。



【竖樋の仕組み（新しい形式）】



【八反沼の竖樋（新しい形式）】

洪水吐（こうずいばけ）または余水吐（よすいばけ）ともいいます。大雨等でため池の水が堤から溢れ出すのを防止する仕組みです。



【鴻ノ面沼の洪水吐】



【寺沼の洪水吐】

4.5 ため池の灌漑用以外の機能

ため池には水田灌漑のほかにも多くの機能があります

- ・ 洪水防止
- ・ 土砂流失防止
- ・ 防火用水として使われることもあります
- ・ 生態系保全（鳥、魚、昆虫等の生息）
- ・ 憩いの場所（水辺の景観を楽しむ、遊歩道、魚釣りなど）

4.6 ため池の課題

施設の老朽化

- ・ 侵食による土手の漏水
- ・ ヘドロ、落ち葉、倒木等の堆積による貯水量の減少
- ・ 樋管の老朽化

※いずれも改修には多額の費用が掛かります

農業人口（農家数）の減少によるため池管理者や灌漑用水利用者の減少

- ・ 高齢化
- ・ 農業後継者不足等により、耕作放棄地や休耕田が増えています

第5章 課題研究を終えて（担当：富井）

今回の課題研究を進めるにあたり、西村様(郷土史研究家)、須田様(大雷・秋葉神社宮司)、江原様(埋蔵文化財センター副所長)、藤野様(大岡第一土地改良区理事長)には大変お忙しい中、時間を割いて講義を快く引き受けていただきました。また、宗悟寺、光福寺のご住職には、突然の訪問にもかかわらず快く対応していただきました。心より御礼申し上げます。

課題研究を進めるにあたっては「明るく、楽しく、全員で確認する」ことを基本として、まずは全員でウォーキングトレイル「大谷伝説の里コース」を歩いてみました。さながら遠足気分ではありましたが、班員の半数以上がはじめて歩く道であり、多くの発見がありました。先人が生み、育ててきた歴史・文化の名所・旧跡を訪ね、調査研究を進めるにつれ「ここに、こんな謂れがあるのか」と驚きの連続でした。

都心から 50Km程のこの地にある変わらない自然、先人の知恵と努力によって築かれてきた歴史・文化・史跡を私たちは伝承する使命があると認識します。私たちの課題研究が、その伝承活動の一助となれば幸いです。

5.1 参考資料・ご協力いただいた諸機関

5.1.1 参考資料

東松山市史

東松山市石造記念物調査報告（石仏）

大岡地区の民俗・・・東松山市史編纂調査報告書 1 5 集

ふるさとの寺・・・秋山 喜久夫、敏蔭 英三

東松山市伝説と夜話・・・田村 宗順

蘇る比企一族・・・清水 清

東松山市ホームページ

5.1.2 ご協力いただいた諸機関

東松山市役所 地域生活部 文化スポーツ課

東松山市ウォーキングセンター

東松山カントリークラブ

大岡市民活動センター

5.1.3 ご協力をいただいた方々

西村 裕 氏 郷土史研究家

須田 千秋 氏 大雷神社、秋葉神社 宮司

江原 昌俊 氏 埋蔵文化財センター副所長

藤野 一男 氏 大岡第一土地改良区理事長

雲井 幸雄 氏 宗悟寺、光福寺 住職